

マカッサル人村落社会における農民の経済的依存先に関する研究

平成 19 年度入学
派遣先国：インドネシア共和国
竹安 裕美

キーワード：南スラウェシ，経済的貧困，開発プログラム，借金，金貸しと農民の関係性

対象とする問題の概要

インドネシア・南スラウェシ州は東部インドネシアの玄関口といわれ、古くから交易、商業の中心地として栄えてきた都市がいくつも存在する地域である。しかしひとたび地方に目を向ければ、乾燥などの厳しい自然環境と、灌漑設備の未整備や不均衡な土地所有などに代表される社会状況から、経済的貧困状態にある人々を多く抱える地域でもある。農民達の中には肥料購入等の必要経費を自分たちで賄えず、前借りという形で高利貸しから借金をせずには農業を行えない者が多く、負のスパイラルから抜け出せない人々が少なくない。

この状況に対してインドネシア政府や海外援助機関は、これまで様々な開発プログラムを実施してきた。特に農民たちに必要経費用の回転資金を提供するプログラムは、借金をせずに農業ができることから収入向上の効果が期待されていた。しかし実際には回転資金はいつの間にか消え失せ、農民達はもとの状態に戻るといったケースが数多くみられる。

研究目的

このような状況のもと、開発プログラムが成果をあげられなかった原因を検証する研究はインドネシアを問わず世界各地で行われてきた。特に近年主流となっている「住民参加型」の視点から、プログラム立案から実施に至る過程における住民のオーナーシップ、イニシアティブ等々、様々な角度からの検証がなされてきた。しかしいずれも当該プログラムを中心に据え、それに対する住民のリアクションの検証であり、より住民側に立ち、社会、文化、経済、歴史等の状況を十分に踏まえた上での検証はまだ少ないといえる。

そこで本研究では、経済的貧困状態にあるとされている農民達の日常生活における金銭的なやり取り、特に経済的依存先（借金先）との関係性に注目し、その歴史的变化と社会的、文化的背景等を調査し、借金をめぐる農民と金貸し側の関係性の変遷と現状を明らかにすることを目的としている。

フィールドワークから得られた知見について

今回フィールドワークは予備調査であるため、まず調査対象村選定を地元 NGO の協力を得て行った。対象村は、南スラウェシ州の中でも最貧困地域といわれている



図 1 今回滞在した Turatea Timur 村概観

Jeneponto 県の中からいくつかの村を推薦してもらい訪問、最終的に Tamalatea 郡 Turatea Timur 村を選んだ。その後同村に一週間滞在、村の概要把握に努めた。

同村は 1996 年に隣村から分離した行政村としては新しい村である。村役場の資料によると、人口 2,098 人の 80% が農業に従事、灌漑設備は無く、雨季の水稲、トウモロコシ、乾季のヤシ砂糖づくりなどで生計を立てている。住民の 65% が土地無し層であり、乾季には男性の 75% が州都マカッサルでの建設労働やベチャ（人力自転車）引きなどの出稼ぎに行く。

村役場での聞き取りから、村長が実は隣村在住の元王族（Jeneponto 県には小王国時代に Binamu 王国が存在しており彼はその末裔）であること、村役場の役人の一人は村有数の金持ちで、スハルト体制化の開発政策によって徐々に収入を増やし、土地を買い足して金持ちになった新興地主であることなどが明らかになった（別の村人によると、彼は金貸しの一人のようである）。

農民グループのリーダーへのインタビューでは、回転資金を提供する NGO のプログラムの話を聞くことができた。結果は資金を回転させることができずわずか一年で頓挫してしまっていた。リーダーはその原因を「メンバーがこのプログラムの有効性をわかっていないからだ」と述べつつ、メンバーが金貸しに戻っていくことについては「金貸しの場合は返済を待ってもらえたり、お金を借りるのに面倒な手続きが必要ないからな」と語っていた。また滞在先のおばさんからは「親戚以外からお金を借りるのは怖いね。高利貸しなんてとんでもない」と親族間でのお金の貸し借りが普段から行われていることを聞くことができた。



図2 村長の親戚の家。あまりの豪華さに村にいることを忘れそうである。元王族の経済状況がわかる。

今後の展開・反省点

以上のようにフィールドでは概要把握に終始したが、その中でも金を貸す側、借りる側双方の話が聞けたのは有益であった。実は今回のフィールドワークを通して研究内容を大幅に変更することとなった。このため、今後は文献収集を一からやり直すことから始める。特にパトロンクライアント関係に関する文献と、インドネシア政府による開発政策や土地制度に関する文献に重点をおいて収集する必要がある。同時に先行研究が少なく長期のフィールドワークの必要性があるため、その準備を平行で行う。

反省点としては、村滞在中は終始「お客様」であったため、なかなか一人で思うようには行動できなかったことが挙げられる。次回フィールドワーク時には、この点を滞在先家族に十分に説明し理解を得る必要があるだろう。また、日常会話が現地語であるマカッサル語で交わされていることから、インドネシア語の向上のみならずマカッサル語の習得も今後の課題として残った。

以上



図3 ハサヌディン大学創立記念日イベントにて（右から二人目が報告者、三人目が副学長）副学長には人類学科教授を紹介していただくなど、大変良くしていただいた。